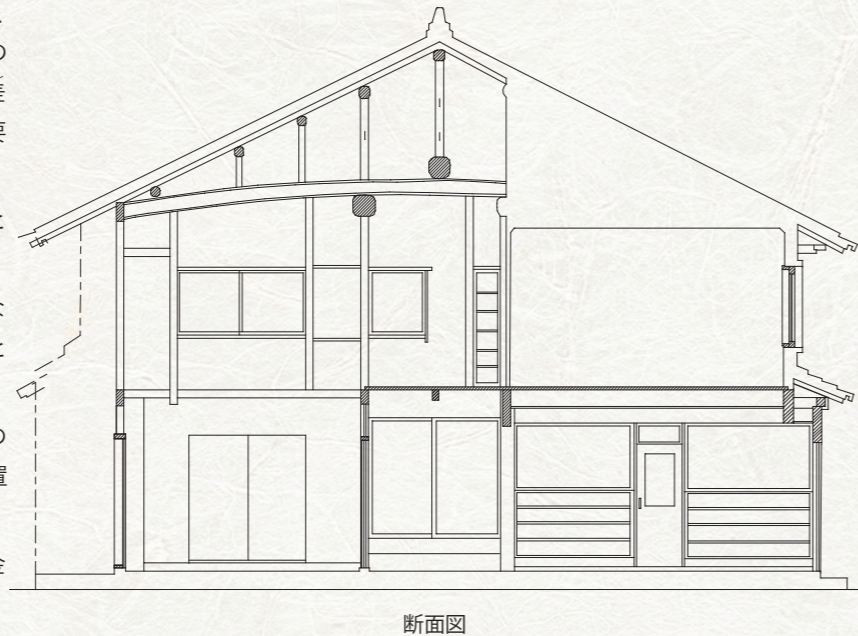
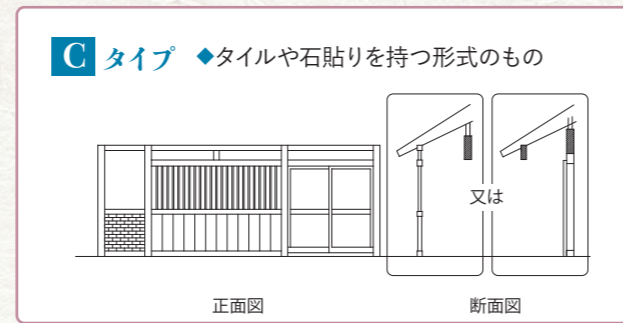


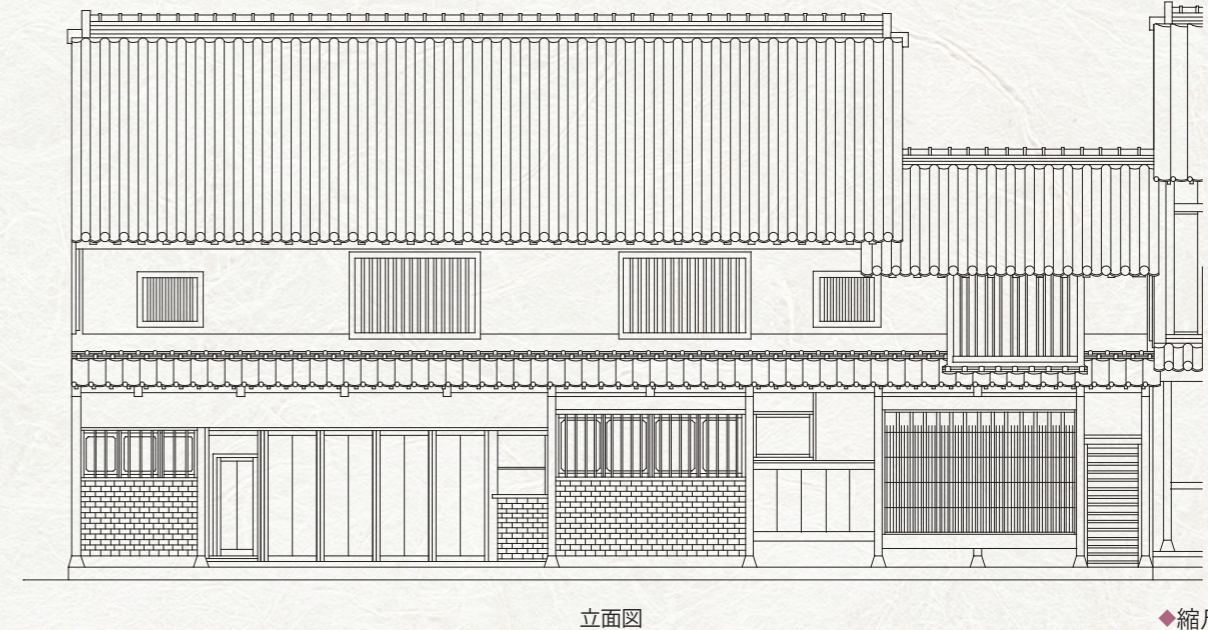
【具体的な建築例】

わたや薬局 (下川原) Cタイプ

- ◆わたや薬局(長野家)は、代々薬屋を営んでおり、創業は、慶長年間に遡ると言われています。間口8間、敷地面積約300坪の屋敷地が、今日までよく残されています。
- ◆屋根は、本瓦葺きで、1階軒庇は、現在、棧瓦葺きとなっています。この軒庇は、戦後間もなく道路拡幅のために1尺程切り縮められました。いわゆる「軒切り」と呼ばれ、下川原などでは、痕跡を見ることができます。
- ◆外観は大きく3つに区別されています。下手から3間半は、薬屋を営むミセ空間として通り側が大きく開口され、板戸(雨戸)6枚を引き出す形式になっています。軒庇の下に長さ3間半、高さ1尺7寸(約50cm)もの長大な差鴨居(人見梁)を掛け渡しており、これが店構えの重要な特徴となっています。
- ◆1階の格子窓には、当初は金属製格子がはめられていたと考えられますが、現在は、木製格子となっています。
- ◆上手の落棟部分は、ザシキに続く玄関に相当し、繊細な親子格子による出格子と舞良戸で構成され、ミセ部分とは対照的な外観構成となっています。
- ◆2階は、中央に階高いっぱいにはけられた大型の矩形の虫籠窓が2か所あり、その左右に小さな虫籠窓を配置し、上手には漆喰塗籠の出格子窓を設けています。
- ◆虫籠窓は、いずれも矩形の額縁を型取り、痕跡からは、金属製の丸格子がはめられていたことが分かります。



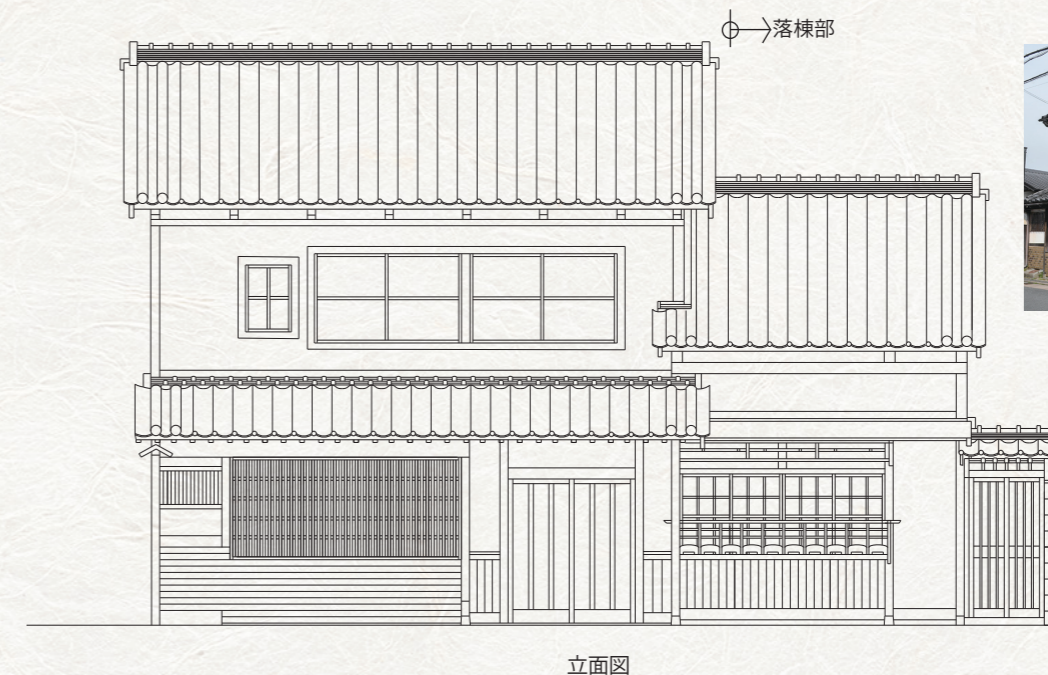
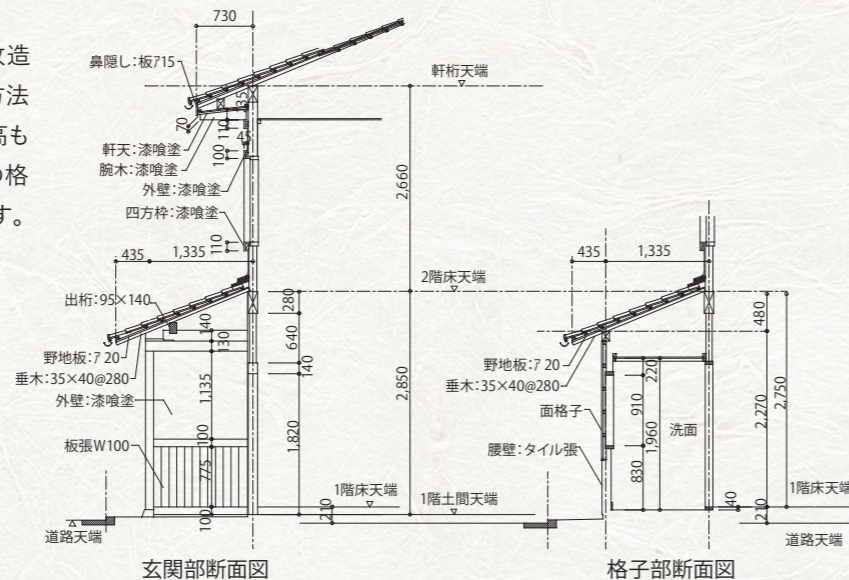
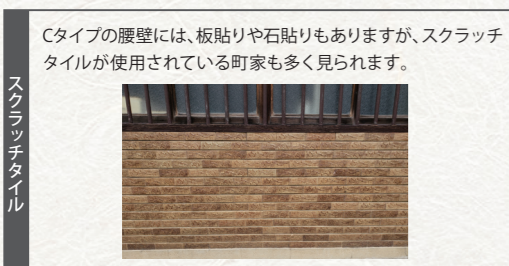
ミセ部分 ← ⊕ → 落棟部
ザシキに続く玄関



◆縮尺1:100

黒田家 (門の外) Cタイプ

- ◆当住宅は、主屋の間口が5間半あります。ただし、向かって右2間は落棟で、玄関は中央にあり、土間を介して居室を左右に取る従来の型を破った間取りです。
- ◆大正末期頃の医院としての建築で、50年程前に大改造されているため、原形は残されていませんが、改造方法は巧みで、元の状態をよく生かしています。2階の軒高も高く、窓も大きく取られており、漆喰の窓枠や、1階の格子窓(腰部は元銅板葺き)などに古風さを残しています。



◆縮尺1:100